

1. 作詩作曲

ナタリー・アリン・スリース(Natalie Allyn Sleeth 1930-1992、旧姓ウェイクリー)は、オルガニストとしても活動しながら 180 以上の作品を残した、アメリカの教会音楽、特に合唱曲(アンセム)や教育的な児童合唱曲で非常に有名な作曲家です。作品の多くは分かりやすく美しい旋律が特徴です。

1930 年、イリノイ州エバンストンで生まれ、4 歳でピアノの勉強を始め、若い頃は合唱団で歌うことで多くの音楽経験を積みました。マサチューセッツ州ウェルズリー大学では音楽理論、ピアノ、オルガンを学び、1952 年に学士号を取得しました。

同年、サザンメソジスト大学パーキンス神学部の説教教授でメソジスト教会の牧師ロナルド・E・スリース(Ronald Eugene Sleeth、1921-1985 年 4 月 11 日)と結婚、1969 年から 1976 年までハイランドパーク連合メソジスト教会の音楽書記を務め、この間ジェーン・マーシャルに音楽理論を学びました。

1989 年にはウェストバージニア・ウェズリアン大学から、1990 年にはネブラスカ・ウェズリアン大学から名誉博士号を授与されました。

2. 讃美歌誕生とインスピレーションの背景

1985 年初頭、最も有名な作品の一つ「Hymn of Promise」を作詩作曲しました。その誕生の経緯を、ナタリー自身の作品について解説した書籍やメモ、および出版社(Hope Publishing)の資料にこう記しています。

「友人の死を深く考える機会があり、凍てつく冬と新たな命が芽吹く春という自然のメタファー(隠喩)を用いて生と死、死と復活というテーマを音楽で表現したいと考えていました。そして T・S・エリオットの詩『四つの四重奏曲』(*1)に『in our end is our beginning 我々の終わりこそが我々の始まりである』という一節を見いだしたのです。これらの矛盾するように見える『対』が、『神がそれを実現させようとするときはいつでも、一方から他方が生まれる』という命題につながりました(*2)。そして、翌日か二日後には『Hymn of Promise』を書き上げました」。

『Hymn of Promise』には子どもが歌うような純朴さが漂っていますが、大人をも一瞬で魅了する力を持っています。テキストには奥深く深遠な神学的概念(福音)が託されているにも関わらず、子どもが理解できる程の平易な言葉と、優しく語りかけるような穏やかで美しい旋律で表現しています。そして、人生の深淵の縁に立つ一人ひとりを、イエス・キリストが伴っていてくださるさいわいで覆い包み、神への確かな信仰と希望を与えてくれます。

この『Hymn of Promise』は、フロリダ州セントピーターズバーグのパサデナ・コミュニティ教会でのフェスティバルコンサートで初演されましたが、その直後、末期悪性腫瘍で急逝した夫ロナルドの葬儀で、「ロンへ」との献呈辞が添えられて歌われました。

そしてナタリーも、最愛の夫を送った **7 年後**(R1)の 1992 年 3 月 21 日(61 歳)、コロラド州デンバーで癌のため召されました。彼女の葬儀に参列した友人であり作曲家でもあった R.G.ハフ(R. G. Huff)が次のように述べています(*3)。

「1992 年 3 月、私はデンバーのウェルチャー長老派教会でナタリー・スリースの追悼式に出席しました。そこは私が奉仕していた教会の向かい側でした。私は数年間彼女と文通のような関係をしており、特に子どもたちの音楽に対する彼女の教会音楽への貢献を祝うためにそこに行きたかったのです。」

「葬儀の 1 時間前から、教会の合唱団、独唱者、オルガニストが彼女の歌、讃美歌、アンセムを演奏しました。それは彼女の執筆の遺産への素晴らしい賛辞でした。...」

「神学者であるナタリー・スリースは礼拝へと進みました。沈黙から歌が立ち上がり、言葉が旋律を求め、闇が光となり、未来の日に希望が明らかになっていきました。」

「最後に——これは 1992 年 3 月の午後に関係しています——彼女は、人生が死へと移り、死が永遠へと道を譲り、疑念が信念へと変わった者には最終的な勝利がもたらされることを証しました。」

3. 『Hymn of Promise』に二つのタイトルが存在する経緯

Hymn of Promise (約束の賛歌)

1985 年にコーラル・アンセム(*4)として作曲された際の正式なタイトル(原題)ですが、『The United Methodist Hymnal』では、讃美歌#707「"Hymn of Promise"／約束の讃美歌」として登場しました。

In the bulb there is a flower (球根の中には)

多くの人々がこの歌い出しの歌詞で歌を認識したため、出版元の編集方針で歌い出しがタイトルとして表記されました。カナダ合同教会の讃美歌集『Voices United』讃美歌#703 や、アメリカのユナイテッド・チャーチ・オブ・クライストが制作した『The New Century Hymnal』の讃美歌#433 などでは、歌い出しである『In the Bulb There Is a Flower』が採用されています。

日本では「球根の中には」の邦題、すなわち「In the Bulb...」の方で知られることが多いです。

*1 : T・S・エリオット(アメリカ合衆国出身の英国の詩人、1888-1965 年、1948 年ノーベル文学賞受賞)の代表作の一つ。下記リンク先をご参照下さい。

<https://www.koganei-catholic-church.com/wakachiai-240415/>

「T. S. エリオットの『四つの四重奏』を再び "聴く"」

*2 : 讃美歌の内容理解の一助として ~ベン図

ベン図(Venn diagram)とは、イギリスの論理学者ジョン・ベンにちなんで名付けられ、幅広い分野で情報の整理、比較分析等の補助手段として使われる技法です。

これをこの讃美歌に用いると、「冬と春」「沈黙と歌」「闇と朝」「疑いと信仰」「死と復活」、そして「現状(今、目に見えるもの)」と「未来(今は目に見えないもの)」などが、「隠された約束(Hidden Promise)」「神の計画」という共通の要素でつながっていることが分かります。例えば、「In the Bulb There is a Flower」は単なる自然の描写ではなく、「一見、終わりや闇に見えるものの中に、生命や希望がすでに秘められている」という、希望のメッセージであることが明確になります。

*3 : 引用元 <https://www.umcdiscipleship.org/resources/history-of-hymns-in-the-bulb-there-is-a-flower>

「History of Hymns: "In the Bulb There Is a Flower" By C. Michael Hawn」の Google 自動翻訳を一部編集

*4 : コーラル・アンセム(Anthem)は讃美歌(Hymn)と同様、キリスト教の礼拝で用いられる音楽ですが、主な違いは「誰が歌うか」「礼拝のどの場面で歌うか」「演奏形式」にあります。讃美歌は「会衆(参加者全員)が歌うシンプルな歌」、アンセムは「聖歌隊が歌う少し複雑な合唱曲」です。

以上